

# 岩手県学童保育研究集会



岩手県学童保育連絡協議会  
〒020-0122  
盛岡市みけ3-38-20  
岩手県青少年会館内  
Tel・Fax 019-681-0651



## 困難を抱える家庭と学童保育

講演 東京成徳大学 下浦忠治氏

第48回岩手県学童保育研究集会は11月19日に岩手大学で開催されました。県内の学童保育の保護者、指導員ら296人が参加、午前は全体講演、午後は7分科会が行われました。

## 岩手県学童保育研究集会特集号

全体講演は「困難を抱える家庭と学童保育」と題して、東京成徳大学講師の下浦忠治氏が講演を行いました。

下浦氏は講演の冒頭、「今の日本には厳しい暮らしの中で育っている子どもたちがいる。貧困、虐待は見えにくいが増えている」と述べ、「虐待対応の基本は早期発見、早期対応。指導員や保護者の皆さんは自分に何ができるのか。それぞれに考えてみてほしい」と語りました。

講演要旨は以下の通り。

**▽貧困・虐待の現状**

子どもの貧困が注目されたのは2009年から。今の日本は子どもの7人に

1人が貧困という時代になった。今現在では貧困でなくても病気や事故などで家族人生に変化が生じてしまうこともある。貧困はいつ、どここの家庭にでも起こりうる問題だ。

日本の虐待件数は2016年度12万件を超えた。その中でも増えているのは子どもの前で激しい夫婦げんかをする、面前DVなどの心理的虐待。虐待は経済的に困難な家庭だけの問題とは限らない。親が「見える学力」を求めるあまりに子どもを精神的に追いこんでしまう教育虐待や、父親の帰りが遅く母親ひとりです育てをしなければならず、精神的に追い詰められた末の虐待もある。虐待は一部の特別な親だけの問題ではない。

虐待、貧困などの困難を抱える家庭は人との付き合いから遠ざかり、孤立していく。

**▽学童保育の役割**

学童保育はただ子どもを預かるだけの施設ではない。家庭の養育を支えていくという役割がある。まず大切にしてほしいことは子どもが安心して帰ってくる場所



を保障すること。子どもたちは学童保育が魅力ある場所でないといくら通い続けることができない。毎日の安心できる生活をしっかりとつくり、一人ひとりと関わっていくことで指導員は子どもの異変や困難に気付くことができる。そして、保護者の皆さんには、ぜひそのことを応援していただきたい。

### ▽指導員の役割

指導員は教師でもない、家族でもない「第3の大人」。困難を抱えた子どもにとって、いつも気にかけてくれて話を聴いてほしいと思える大人の存在は欠かせない。「聴く」という関わりを大切にしてほしい。傷ついた子どもは仲間との遊びの中で自己有用感（認められ、

あてにされ、受け入れられている実感）を持つことで回復していく。遊びの中で関わり合い、育ち合う空間が学童保育にはある。

保護者に対しては、子どもの様子を伝える、交流行事などを通じ保護者同士のつながりをつくることを心がけ、孤立しないように支えていく。「一緒に育てよう」「ひとりではない」ということを繰り返しアプローチし続ける。それが虐待防止にもつながる。

### ▽保護者のつながり

保護者同士のつながりも子どもにとっては大きな安心感になる。自分を見守ってくれる大人の目線が確認できれば虐待は連鎖しない。子どもは血のつながりのない大人に愛情を注がれることでまっとうな社会人になっていく。それは増え続ける日本の虐待の歯止めにもなる。周りに孤立したり、困っている保護者がいたら声をかけてほしい。自分を気にかけてくれる保護者仲間がいることで救われることがある。

困難を抱える家庭に、自分は何ができるのか。一人ひとり考えてみてほしい。

# 分科会 世話人レポート



第7分科会では、全国で初めて連協としてNP  
O法人化した埼玉県所沢市学童クラブの会事務局長の春口類さんを講師

## 法人化の意義 保護者全員で理解を

### 第7分科会

### 法人化の事例に学ぶ

に招き法人化について学びました。また、県内から盛岡市の学童保育クラブくるみ子ども会が事例発表を行いました。

父母会などの任意団体の場合、高額な運営費を個人名義の口座で管理していたり、重大な問題があった際の責任の取り方

など様々なリスクを抱えています。その解決方法のひとつとして「法人化」を検討する団体が増えていきます。  
事例発表を聞き、法人化で自主運営学童の保育の諸問題が自動的に解決する訳ではなく、法人化する意義を保護者全員が理解し、よりよい学童

保育をつくっていくという精神が大切であることがよく分かりました。  
参加者の皆さまには、ぜひ今後の活動に生かしていっていただければと思います。  
県連副会長  
高橋 洋一郎



「みんなの思い 子育て、仕事、学童保育」がテーマの2017年10月号を使って、学童保育への願いや思いにふれることを目的にしました。

## 学童保育の大切さを再認識

### 第5分科会

### ほいく誌をひらけば…

参加者全員で読み合わせをするにより、黙読より内容が深まった、内容に共感できたという声が多く聞かれました。学童保育の原点を知るこ

とで、先人達が大切にしてきたことや、学童保育の大切さを再確認することができ、そのバトンをまた次の世代につなげていく役割を感じ取れたよ



うな気がしました。また「たのしいな」のコーナーで紹介されていた「色んな形で物語を作ってみよう」に全員でチャレンジ。ユニークな発想がたくさん出てきて、大笑いの時間も共有できました。  
学童ほいく誌は、学童保育の「今」が詰まった当事者による当事者のた

めの月刊誌です。読んで活用していくことで、学童保育が深まり、そのたくさんの種がいつしか実になっていくことが望まれます。継続していくことと、学び続けることが大切だと実感した分科会でした。  
県連事務局長  
門田 弘之



事前アンケートの中に「チームワークが良いとほいくということか?」「良くするためにほいくしたらいいか?」「仲が良いと

## 指導員のチームワークを考える

### 第2分科会

### 学童保育の生活づくり

の違いは何か?という質問がありました。自分の学童は、うまくいっているのか?どんな悩みが多いのだろうか?分科会の

組み立てを考える時に私がお考えたことです。参加者の皆さんにも、ぜひ、悩んでいることを共有し、自分なりの考え

を発言し他の方の意見も聞いてもらいたいと考え、グループトークの時間を持ちました。  
助言者の下浦先生の答えは「仕事をしていく上で、同じ方向をむいて協働できること」いろいろお話しをいただきましたが、まとめるとこんな感じでしょうか。とても納

得させられるものでした。私たちは、常に子どもたちのためという視点を忘れてはいけません。そして指導員がお互いの考えを理解し合い共有することが学童保育には大切なことだ、と再認識することができました。  
県連事務局次長  
橋本 有紀